

源実朝の聖徳太子信仰

—— 二躰の聖徳太子像をめぐる ——

門 屋 光 昭

はじめに

筆者は、次の歌に若き日の源実朝の心を見る。

またの年、二所へ参りたりし時、箱根の御海を見て
よみ侍る歌
たまくしげ箱根のみうみけけれあれや二国かけてな
かにたゆたふ¹⁾

「けけれ」は、上代東国方言で「こころ」である。箱根の湖は心があるのであろうか、相模と駿河との二つ国にはさまれて、いずれにつくともなく中でたゆたっている。歌の意味はそんなところであろうか。

源実朝(1192-1219)は、鎌倉幕府3代将軍という政治家であるとともに、『金槐和歌集』という秀でた歌集をもつ中世の代表歌人の1人である。その実朝は、父・源頼朝と母・北条政子との間で、源家と北条家(平家)という全く異質な二つの血の間に、いずれにつくともなくたゆたう若き日を送った。

そうして、若き実朝は、和歌では万葉調と古今・新古今調、宗教では南都北嶺の旧仏教と浄土・禅・法華の新興仏教、さらに政治体制では皇室と幕府との間でも、たゆたうのであった。

そのたゆたう実朝が自らのアイデンティティを求めて、巡り会うべくして巡り会ったのが聖徳太子であった、と筆者は考えている。それほど実朝の太子信仰は、太子信仰史の中でもひとときわ光彩を放っており、時を超えて、人と人との出会う意味を教えてくれているように思う。

本稿では、実朝に深く関わる2躰の聖徳太子像を通して、実朝の太子信仰を明らかにすることを目的とする。ただ、その心像の表現である

『金槐和歌集』での検証は、別に稿を改める²⁾ こととして、ここでは特に触れないでおく。

1 実朝の南無太子像

鎌倉幕府の事績を記した『吾妻鏡』に、次のような注目すべき記事がある³⁾。

○承元4年(1210)11月22日条

御持仏堂に於て、聖徳太子の御影^{南無}を供養せらる。真智房法橋隆宣導師たり。此事日來の御願と云々。

○建暦2年(1212)6月22日条

御持仏堂に於て、聖徳太子の聖霊会を行はる。莊嚴房以下、請僧七人と云々。

この二つの記事によって、源実朝は自らの持仏堂で、少なくとも2回以上、聖徳太子を供養する法会を催したことがわかる。

ところで、聖徳太子の薨去は、『日本書紀』によれば推古天皇29年(621)2月5日だが、『上宮聖徳法王帝説』では壬午の年、すなわち推古天皇30年(622)2月22日であり、以後の太子伝の多くがこれに従っている。ちなみに『上宮聖徳法王帝説』では生年は甲午の年であったから、享年49歳ということになる。

つまり、11月22日と6月22日とは、月こそ異なるが祥月命日になり、この日に二つの供養の法会が行われたのである。

さて、『吾妻鏡』の前者記事にある「聖徳太子の御影を供養」とは、新造の聖徳太子像の開眼供養であろう。「南無仏」と割注があり、「日來の御願」というから、実朝は自らのために持仏堂に安置する「南無仏」を新造し開眼供養して、日頃からの宿願を果たしたのである。

「南無仏」は、南無太子像と呼ばれる聖徳太子の2歳像である。典拠は『聖徳太子伝暦』2歳の条で、「掌を合わせ手を稽げ東を向きて南無仏と称して再拝す」とあり⁴⁾、これに基づいて「聖徳太子絵伝」が描かれ、彫像が造られたと考えられている。

現存する鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての南無太子の彫像を見ると、像容は腰下に緋袴を着けただけの半裸で、胸の前で合掌した姿である。子供らしい無邪気さの中に、崇高さのある種のかげりを額に漂わせているのが、特に印象的であるといえる。

聖徳太子像には種々の相がある。大別すると、南無太子像、孝養太子像、黒駒太子像、摂政太子像、講讃太子像の5相になる。また、聖徳太子像は、岩手県地方の「参りの仏」⁵⁾の信仰対象となっている像のように、民間で祀られる例も少なくなく、現存する遺品が極めて多い。しかし、実朝が供養した聖徳太子像以前に遡りうる記年銘のある彫像となると極めて少なく、僅か次の2例しかない⁶⁾。

○治暦5年(1069) 奈良・法隆寺絵殿蔵の聖徳太子七歳座像

○保安2年(1121) 奈良・法隆寺聖霊殿蔵の摂政太子座像及び従者像

実朝の供養した聖徳太子像がいかに古いものか、これによって明らかである。しかも、現存する南無太子像で製作時代が判明している初期の彫像は次の通りであるから、実朝の太子像は非常に古いことがわかる。

○正応5年(1292) アメリカ・個人蔵

○正安4年(1302) 奈良・国源寺蔵(奈良・橘寺旧蔵)

○嘉元2年(1304) 奈良・伝香寺蔵

○徳治2年(1307) 奈良・法隆寺蔵

○延慶2年(1309) 京都・円成寺蔵

つまり、実朝の聖徳太子像は、南無太子像として最古の作例である可能性が高いのである。現存していないため、像容や納入品など確認することはできないが、太子信仰史の上からも極めて重要な位置を占める太子像なのである。

続いて、『吾妻鏡』の後者記事にある「聖霊会」

について検討しよう。「聖霊会」は、聖徳太子の命日に行われる供養法会である。現在でも太子関係寺院の代表格である大阪の四天王寺では4月22日、奈良斑鳩の法隆寺では2月22日に行われており、特に筆者が参列した昭和46年の四天王寺の聖徳太子1350年記念大法要は盛大であった。

ところで、『吾妻鏡』には、建暦2年(1212)6月22日条の他には、聖霊会の記事がない。おそらく実朝は私的な法会として行っていたものと思われる。試みに、この年以降の実朝の行動を『吾妻鏡』で探ると、太子が薨去した2月22日、建暦2年の聖霊会の行われた6月22日、南無太子像が供養された11月22日の3日に関しては、將軍実朝が出席しなければならないような幕府の公的行事は行われていない。確かに、建暦2年の聖霊会は、「莊嚴房以下請僧七人」を招き盛大に行ったが、これも「日來の御願」を果たす最初の法会だったからで、以後は私的につつましく催していたに違はなく、それ故に『吾妻鏡』にも記載されなかったと思える。

実朝の持仏堂の本尊は、当時は五字文殊菩薩であった。『吾妻鏡』によると、その供養は度々行われているが、導師の名前のみを記す簡潔なもので、本尊の定期的な供養祭祀でもその程度であった。建保4年(1216)正月17日、持仏堂の本尊として新たに釈迦像が運慶の手によって新造され、京都より鎌倉に到着した。その開眼供養が同月28日に「導師莊嚴房律師行勇、請僧七口」でもって行われている。行勇は、臨済宗開祖の栄西の弟子で、実朝が最も寵愛し教を請うた禅僧で、後に栄西の後を継いで寿福寺の住職となった。だから、建暦2年の聖霊会でも導師を勤めていたのである。

ところで、建暦2年の聖霊会にはもう一つの意味があったように思える。『吾妻鏡』の建暦2年(1212)6月20日条に、次のような記事があるからである。

將軍家寿福寺に渡御す。方丈より手づから仏舍利三粒を相伝せしめ給ふと云々。

この「方丈」とは栄西のことであり、実朝は栄西から仏舍利3粒をもらいうけたのである。

仏舍利を金槌でたたいたり、水に投げ入れたりして試してみたのは、日本人として初めて舍利に接した蘇我馬子であった。だが、その馬子も舍利の尊さを悟り、大野丘の北に日本最初の塔を築いて、柱頭に舍利を納めたことが『日本書紀』の敏達天皇14年(585)条に記されている。以後、仏舍利は釈迦の遺骨として仏教徒の極めて篤い崇拜を受けるのである。

建暦2年から4年後のことであるが、建保4年(1216)6月20日、鎌倉に1通の宣旨状が届いた。『吾妻鏡』によると、同月5日の夜に東寺に白波(盗賊)が入り、舍利並びに仏具を盗み出した。舍利は1代教主の遺身であり、仏法は既に衰微期(末法)に入り、国を鎮めるを失って来ているというのに恐るべきことなりと、舎利の行方を五畿七道に尋ねているのである。

実朝は、このように貴重な仏舍利を3粒伝授されたわけだが、その納入場所について『吾妻鏡』は何も答えてくれていない。だが、筆者は、仏舍利が納入され祀られていた可能性の高い場所を2か所指摘することができる。その1は実朝が建立した大慈寺であり、その2は南無太子像である。

大慈寺は実朝が建立した唯一の寺である。

懺悔の歌

塔を組み堂をつくるも人の嘆き懺悔にまさる功德やはある

と詠んだ実朝である。この歌を含む『金槐和歌集』の雑部の釈教歌は、実朝の到達した深い仏教観を我々に教えてくれる。

大乘、中道観を作る歌

世の中は鏡に映る影にあれやあるにもあらずなきにもあらず

罪業を思ふ歌

炎のみ虚空に満てる阿鼻地獄ゆくへもなしといふもはかなし

功德を得る歌

大日の種子より出でて三摩耶形さまやぎうまた尊形

となる

心のこころをよめる

神といひ仏といふも世の中の人心のほかのものかは

人心、常ならずといふことをよめる

とにかくあなきだめなの世の中や喜ぶ者あれば侘ぶる者あり

僅か22・23歳の青年が到達したとは思えない、驚くべき深みのある歌群で、その代表が先の「懺悔の歌」である。堂塔建立という最も大きな善行よりも、おのが罪深さを嘆いて懺悔することの尊さを鋭く詠ったのである。

実朝は、この歌の通り、北国の王者・藤原秀衡の旧都平泉にならって、勝長寿院を初め数多くの寺院を新興都市・鎌倉に建立した父・頼朝とは異なり、堂塔建立にさほどの関心を持たなかった。だが、唯一の例外が「君恩父徳を報ぜらんため」と称して建立した大慈寺であった。

建保2年(1214)7月27日、「終日甚雨」の中に、大慈寺の落慶供養が行われた。導師は「葉上僧都正栄西」で、「伴僧二十口」であった。これを遡る4月18日、御所において、北条義時・大江広元・三浦行村ら主だった者が集まり、供養の次第についての評定を行った。実朝建立の唯一の寺院であり、建立主旨から見ても導師は、京都から高僧を招請すべきという意見が大勢を占めていたし、実朝自身そうした気持ちを抱いていた。だが、広元・行村らは、かつて頼朝が建立した勝長寿院以下の伽藍供養の際、都から三井寺・醍醐寺の碩徳を招いたため、その往還の間、万民の煩いとなった。このようなことは「作善」の本意に非ざるから、今回は関東止住の僧を用いることが一の徳政であると進言をした。実朝はこれを容れて、7月27日の導師栄西による供養となったのである。

『金槐和歌集』の成立は、建暦3年本(定家所伝本)によって、建暦3年12月18日、すなわち同月15日に改元されたので、建保元年(1213)12月18日説が有力である。実朝22歳の暮れのことである。とすれば、「懺悔の歌」はそれ以前に作歌されたことが確実である。だが、大慈寺

建立と落慶供養を背景に置いて歌の心意を考えると、実にピッタリとするから不思議である。もともと、地所のト占は建暦2年(1212)2月で、10月にはかなり出来上がり、実朝の検分を得ているし、翌建暦3年(建保元年)5月に和田義盛が謀反を起こしたので、やむなく落慶供養が延ばされていたのだから、大慈寺建立にともなって生じた実朝の自戒の念を歌ったものと考えてもよからう。

広元らに「作善」の本意に非ず、と進言されて我に帰った実朝であるが、筆者はこの言葉に、山背大兄王に残された聖徳太子の遺戒「諸悪莫作、諸善奉行」⁷⁾を思い起こすのである。

落慶供養が行われた約3か月後の10月15日、大慈寺で初めて舍利会が導師栄西によって催された。3年前、栄西が手づから実朝に伝授した仏舍利を再び栄西の手で大慈寺に納入され、その供養の法会がこの舍利会だったと見て誤りあるまい。

ところで、「仏牙舍利記」(『群書類従』24 釈家部 443)によると、実朝は、夢告でその前身が宋の能仁寺の開山道宣律師と知らされ、大船を造って宋に使者を送り、道宣の牙舍利を手に入れた。この牙舍利を大慈寺に納めたので、毎月15日に舍利会を行うことになったというのである。この説話は、後述する宋人陳和卿をめぐる渡宋計画の類話であるが、弘安8年(1285)建立の円覚寺舍利殿に大慈寺の舍利が施入されたから、「円覚寺舍利殿縁起」ともなった。

さて、栄西から伝授された仏舍利の、可能性のあるもう一つの行き先は、実朝の南無太子像の胎内である。

実朝の南無太子像以後、鎌倉時代末期までに造立された聖徳太子像で、製作年代が明らかで現存している像は十数体あるが、その中で胎内に舍利塔および舍利を持つことが判明している像は次の4体である。

- 文永5年(1268) 奈良・元興寺極楽坊蔵、孝養太子像(舍利塔2基)
- 文永11年(1274) 吉野・金峰山寺蔵、孝養太子像(舍利塔1基)
- 嘉元2年(1304) 奈良・伝香寺蔵、南無太子

像(舍利容器)

- 延慶2年(1309) 奈良・円成寺蔵、南無太子像(舍利塔1基)

他に、製作年代が鎌倉時代末期から室町時代初期とされている元興寺極楽坊蔵の南無太子像には、納入物としては非常に大きな5寸7分の舍利塔がX線によって確認されている。また、徳治2年(1307)の法隆寺蔵の南無太子像は舍利殿に安置されており、そこに祀られる舍利は、合掌した2歳の太子の手からこぼれ落ちたものだと、法隆寺の『古今日録抄』に記されている。同じく『別当記』には舍利殿の建立を承久元年(1219)といい、当初は太子絵像と舍利を祀っていたそうである。

聖徳太子像の胎内に舍利を納入にするようになったのは、いつの頃からか定かではないが、聖徳太子が「和国の教主」として信仰されたり、合掌して南無仏と唱えた、その太子の手から舍利がこぼれ落ちたという伝承が生まれたりした以降のことであろう。

したがって、実朝は南無太子像に栄西から伝授された仏舍利を納入したかどうかは不明ではあるが、その可能性は決してないわけではない。というより、3粒の仏舍利の一部を南無太子像に納入し、残りを大慈寺の舍利会に供養したと筆者は憶測しているのである。栄西から仏舍利を伝授された2日後に、実朝は持仏堂で、栄西の弟子行勇を導師として聖霊会を催しているからである。

2. 天洲寺の孝養太子像

彫像の聖徳太子像のうち、作例が多いのは孝養太子像と南無太子像である。すでに見てきたように、南無太子像で現存最古の像は、正応5年(1292)のアメリカ個人蔵、次いで正安4年(1302)の飛鳥・橘寺旧蔵(奈良・国源寺現蔵)だが、実朝が持仏堂に祀った像は承元4年(1210)で、現存はしていないが、文献上では最古の作例であった。

一方、孝養太子像で現存最古の像は、寛元5年(1247)の埼玉県行田市の天洲寺蔵である。

この像は、33年に1度の開帳を行うだけの秘仏であるが、筆者は学生時代に、この寺の総代を務めておられた友人の実家のご好意によって、特別開帳が許され、恩師の戸田義雄先生や夜久政雄氏・梶村昇氏らを案内して参拝したことがあった⁸⁾。また、その後、1度だけだが、「聖徳太子展」に特別出品されたものを鑑賞する機会があった。だから、数多い聖徳太子像の中でも1級の優品だったという印象が強く残っている。

聖徳太子像は、太子が16歳のとき、病気の父帝の用明天皇を、日夜、衣も解かず看護し、柄香炉をとって平癒を祈られたという伝承をもとに製作された。その像容は、頭髮を美豆良に結い、袍を着て袈裟を懸け、柄香炉を持つのが一般的である。画像、彫像とも極めて多く、立像が普通だが、坐像・半倚像もあり、立像も多様な種々相を見せている。

こうした中で、天洲寺の孝養太子像は、立像で一般的な像容をしているが、頭髮は振り分けにせず、杳は無装飾であるなど表現は簡潔で、写実的な肉取りや襷の大きな流れに運慶風を受け継ぎ、慶禅の力量が十分に示されていると思う。

筆者がこの像に特に注目したいのは、その胎内銘である。

胎内銘は、いずれも墨書銘文であり、昭和13年11月の美術院の解体修理の際に発見されたが、それによって造立理由や願主、仏師などが明らかになったのである⁹⁾。

(腹部の銘)

造立處相模國鎌倉郷
奉造立太子御形像一鉢 慶 尊(花押)
右造立志趣者爲沙彌西阿彌陀佛二親并舍兄二人源有綱並平泰時新武蔵國比丘尼一阿彌陀佛并諸檀那法界衆生出離生死往生極樂所奉造立如件

寛元五年大歳丁未正月十三日

願主西阿彌陀佛

大佛師法橋慶禪(花押)

(後頭部の銘)

法印大くわ正いん雲慶

阿闍梨眞禪

ひくに爲妙尼

きと□くこせん

とら□このこせん

御所ほたいのため

阿闍梨りんはん

(背面肩部の銘)

□□

□永即身成佛

僧良□

□□阿彌陀佛

(頸部の銘)

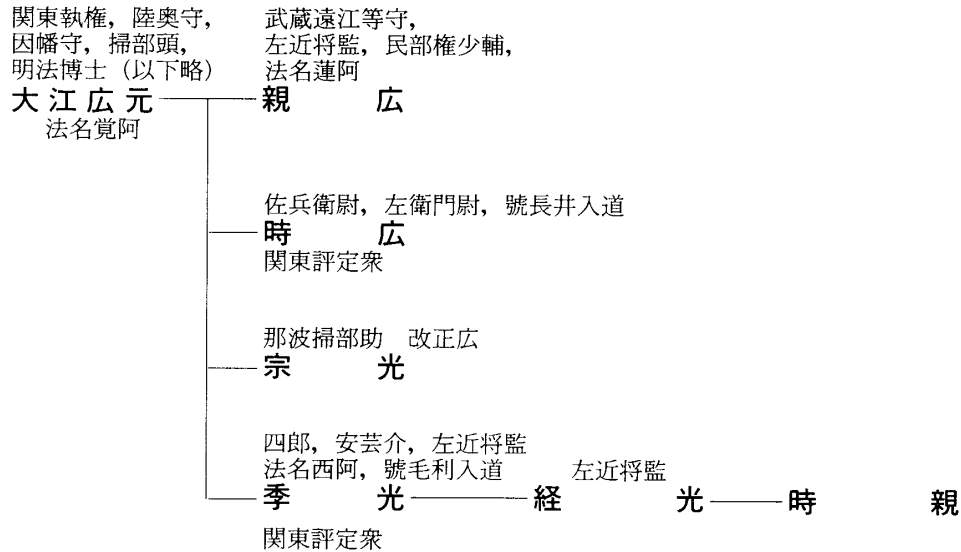
僧爲当法印

尊靈

以上の胎内銘によって、この孝養太子像は、鎌倉で、願主西阿弥陀仏、大仏師法橋慶禅の手で造られ、寛元5年(1247)正月13日に慶尊が導師となって開眼供養がなされたことがわかる。また、造立に際して、結縁した人々の名前やその目的を伺うことができる。

作者の慶禅については、運慶・快慶の系統で、慶派に属する仏師と目される他は全く不明である。その名もこの太子像に留められているのみで、中央仏師なのか地方仏師なのかさえわからない。しかし、杉山二郎氏によると、関東地方に残る鎌倉彫刻として、慶派彫像の示す諸要素をかなりどぎつく持ち、亜流が見せる誇張や不自然さ、形式化といった欠点を示しながらも、顔面や手の造型などになかなか巧みな表現があり、形にはまった鎌倉時代後期の孝養太子像とは異なり、衣文も全体の均整もとれていて、数ある太子像のうちの佳品に足る作品で、中央から下ってきたか、中央の造像雰囲気呼吸してきた人であろうという¹⁰⁾。

「願主西阿弥陀仏」とは、鎌倉幕府の要職である関東評定衆の1人、毛利季光のことであり、その法名が西阿弥陀仏であった。季光は大江広元の4男で、広元は幕府の政治司法機構の中核にあって活躍した文官で、実朝の側近でもあった。「尊卑分脈」によると、その系譜は次の通りであった¹¹⁾。



季光は建仁2年(1202)の生まれで、北条泰時・時頼の執権時代、貞永元年(1232)から宝治元年(1247)正月にかけて関東評定衆の地位にあった。早くから浄土教に帰依し、承元元年(1219)には出家して、毛利入道西阿弥陀仏と号した。没年は、宝治元年(1247)6月5日で、北条時頼らに反旗をひるがえした三浦泰村に与して敗れ、頼朝の法華堂に泰村らと籠もって自害した。

その季光が、誅せられる5か月余前に、「二親并舎兄二人、源有綱並平泰時、新武蔵國比丘尼一阿彌陀佛并諸檀那法界衆、生出離生死往生極楽」のために、造立し開眼供養したのが、この孝養太子像であった。この造立によって、父の大江広元と母、親広・時広・宗光の中ですでに亡くなっていた兄2人(1人は仁治2年没の時広であろう)を始め、源頼政の孫で義経に与して討たれた源有綱、仕えた3代執権北条泰時、新武蔵國比丘尼一阿彌陀佛の菩提を弔い、彼らの極楽往生を祈念したのである。

後に触れるが、大江広元は、承元4年(1210)10月15日、実朝の日頃から尋ねに応じて、聖徳太子の「十七条憲法」や四天王寺・法隆寺の「重宝記」などを収集して供覧している。また、その前後に行った実朝の持仏堂での南無太子像の開眼供養や聖霊会に、側近として参列したことであろうから、広元が実朝ゆずりの篤い聖徳太

子信仰を持っていたとしても不思議ではない。いや、実朝に聖徳太子のことを教え、聖徳太子信仰に導いた張本人が広元なのかもしれない。広元は源平合戦で武功を挙げた武官ではなく、幕府の法制を整備し幕府組織を確立する立場にあった京都から招かれた文官だったから、政治家としての太子に心惹かれ、以前から太子信仰を持っていたと考えるのが妥当のようにも思う。それ故に季光は父の菩提を供養するのに、太子像を造立したのであろう。

ところで、後頭部内側の銘文の中で、結縁者の1人である「阿闍梨りんはん」が「御所ほたいのため」と祈念しているが、この「御所」とは將軍源実朝を指していると考えられる。実朝の後の四代將軍となった九条頼経は康元元年(1256)に亡くなっており、この像が造立されたときには存命中であった。また、遡ると、初代將軍源頼朝、2代將軍源頼家がいますが、彼らとこの太子像を結びつけるものは何もないし、生前の動向も、建久6年(1195)5月、頼朝が東大寺大仏殿落慶供養参列のため、政子と京都に滞在した際、四天王寺に参拝した程度で、強いて聖徳太子に結びつけるほどではない。

だから、西阿弥陀仏こと、毛利季光が亡き両親舎兄や執権北条泰時らのために、その極楽往生を祈ったように、阿闍梨りんはんも横死した將軍源実朝のために、その菩提を祈ったと考え

るべきである。阿闍梨りんはんの俗名は不明であるが、いずれ実朝に深く関わった人物なのであろう。

しかし、それにしても開眼供養の5か月余後、季光は三浦泰村に与して北条時頼と戦い、敗れて自害するのである。季光の娘は時頼に嫁しており、妻は泰村の父・義村の妹だった。『吾妻鏡』によると、季光は戦いを前に「諸衆を勧請して一仏浄土の因を欣びと為し、法事讃を行ひ、之を廻向」したといい、死から逃れることができない戦いに参加したことがわかる。正月に評定衆を辞任したときから、北条時頼によって誅されることを覚悟していたとしたら、その直前に行った孝養太子像の開眼供養は痛ましい。

源頼朝の時代もそうであったが、鎌倉幕府内に生じた争いは悲しい。畠山一族の滅亡にしろ、和田合戦にしろ、頼家や実朝の非業の死にしろ、勝ち残った北条氏の側で編まれた幕府の史書『吾妻鏡』は、その行間を涙なくしては埋め尽くせないような思いがする。

埼玉県行田市の天洲寺は、同寺の「聖徳太子十六歳鏡御影略縁起」によると、元応2年(1320)荒木の四郎藤原長善という地方豪族が開いたといい、孝養太子像は行基作に仮託されている。後世に作成された縁起であることは明白であるが、元応2年開基が事実だとしたら、季光の死後、この孝養太子像はどのような遍歴を積み重ねて、天洲寺までたどりついたのであろうか。

それにしても、文献上初見の南無太子像といい、現存最古の孝養太子像といい、源実朝の篤い太子信仰を示唆していることに驚くのである。

3 実朝と聖徳太子

『吾妻鏡』の承元4年(1210)10月15日条に、次のような興味深い記事がある。

聖徳太子の十七箇条の憲法、並びに守屋逆臣の跡の収公田の員数在所、及び天王寺法隆寺に納め置かる所の重宝等の記、將軍家日來御尋ね有り、広元朝臣相触れて之を尋ね、今日進覧すと云々。

これによると、実朝は日頃から聖徳太子に関わる質問を大江広元にしていたらしく、広元はその史料を収集し、この日、進覧したというのである。すでに見たように、南無太子像の開眼供養はその1か月余後の11月22日のことであり、太子信仰が燃え上がっていた時期と考えることができる。

広元が集めた史料のうち、「十七条憲法」はやがて鎌倉幕府の基本法典である「御成敗式目」に結びついていったと思う。

「御成敗式目」は「貞永式目」ともいい、貞永元年(1232)執権北条泰時が評定衆に命じて編纂した最初の武家法で、51か条からなり、源頼朝以来の慣習法・判例などを規範として、御家人の権利・義務、所領の訴訟などについて平易な成文法としたものである。もとより、聖徳太子の仏教思想を根底にしている「十七条憲法」とは思想内容を異にしているが、51か条が17条の3倍であるなど、「十七条憲法」を強く意識していることは疑うことができない。まして、評定衆の1人が大江広元の四男・毛利季光であり、その季光が両親舎兄とともに編纂を命じた泰時の菩提を供養するために、埼玉県行田市の天洲寺に現存する孝養太子像を造立したことを考えれば、実朝と広元とが共有していた太子信仰を泰時と季光にも認めることができるように思う。

政治家として実朝は確かに見るべき業績を残してはいない。しかし、父頼朝以来の慣習・判例などを規範として、訴訟を裁こうとしたふしはある。そして、聖徳太子の治世に学ぼうとしたことは重要である。その意識が、「十七条憲法」に目を向けさせたのであろう。

しかし、「守屋逆臣の跡の収公田の員数在所、及び天王寺法隆寺に納め置かる所の重宝等の記」となると、かなり特殊である。

周知の通り、『上宮聖徳法王帝説』によると欽明天皇戊午年(538)、『日本書紀』によると欽明天皇13年(552)に、百済の最明王から贈られた仏像を礼拝するかどうかで、崇仏派の大臣蘇我稲目と排仏派の大連物部尾輿・連中臣鎌子との間で論争となり、その対立は子供の蘇我馬子

と物部守屋・中臣勝海の時代、すなわち敏達・用明天皇朝にも引き継がれ、用明天皇死後の後継者争いも加わって守屋合戦が生じた。守屋は邸宅のあった渋川に稲城を築いて奮戦し、馬子・皇子軍を3度退けるが、厩戸皇子（聖徳太子の幼名）が四天王像をつくって戦勝を祈願したので形勢が逆転、ついに馬子側の勝利となった。

その後日譚として、『日本書紀』崇峻天皇紀には次のように記されている。

乱を平めて後に、摂津国にして、四天王寺を造る。大連の奴の半と宅とを分けて、大寺の奴・田莊とす。¹²⁾

こうして、大阪の四天王寺が建立され、守屋の遺産の半ばは四天王寺に施入されたのである。平安時代的一条天皇（在位 986-1011）の頃に聖徳太子御撰と偽託された『四天王寺御手印縁起』には次のように記されている。

守屋が子孫従類二百七十三人を駆摂して、寺の永き奴婢と為す。所領の田園、拾捌万陸仟捌佰玖拾代を没官して、永き財と定め畢んぬ。河内国、弓削・鞍作・祖父間・衣摺・蛇草・足代・御立・芦原等の捌箇所の地、都て集めて拾貳万捌仟陸佰肆拾代。摂津国、於勢・莫江・鷄田・熊凝等の散地、都て集めて伍万捌仟貳佰伍拾代。居宅参箇所並びに資財等、悉く寺分に計え納れ畢んぬ。¹³⁾

ここには『日本書紀』の記事に符合するように、守屋の子孫従類 273 人を永代寺奴婢、所領 186,890 代を永代寺領とする旨と、その所領の内訳が記されている。河内国の 8 か所は、守屋の渋河の家のあった旧渋川郡を中心とする土地で、守屋合戦にも衣摺の里が登場する。守屋は衣摺の榎の上から矢を射かけて馬子軍を退けたのである。

大江広元の収集した「守屋逆臣の跡の収公田の員数在所、及び天王寺法隆寺に納め置かる所の重宝等の記」とは、内容や成立した時期から見て、四天王寺に関する部分はこの『四天王寺御手印縁起』だったと思う。さらに、法隆寺に関する部分も『法隆寺資財帳』だった可能性

が高い。

上原和氏によると、旧守屋領が施入されて四天王寺建立の資財となったことは『四天王寺御手印縁起』で明らかだが、『日本書紀』に施入記事はないものの、一部は法隆寺建立の資財となったと考えられるという。法隆寺の寺領の中に、守屋の旧領地、しかも邸宅のあった本拠地の渋川の郡だけでも、46 町 2 段にのぼる田畑があり、他にも藺が 6 町、庄が 1 処というふうに関係地を『法隆寺資財帳』で確認できるからだそう。¹⁴⁾

『法隆寺資財帳』は、天平 19 年（747）に法隆寺三綱が僧綱に提出した『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』で、法隆寺の建立縁起や施入せられた資財がこと細かく記されており、法隆寺の歴史を知る上で貴重な史料である。法隆寺より流失してしまうまでの 9 世紀から 15 世紀にかけて、盛んに用いられていたらしい。

なぜ実朝が興味を示したのか定かではないが、広元が収集した史料の中にこれらのものが入っていた。いずれ実朝を大いに喜ばしたことは確かであろう。

最後に、実朝の事跡の中で最も不可解なこととされる渡宋計画について考えてみたい。『吾妻鏡』建保 5 年（1217）4 月 17 日条に次のようにある。

宋人和卿唐船を造り畢んぬ。今日数百輩の疋夫を諸御家人より召し、彼船を由比浦に浮べんと擬す。即ち御出有り。右京兆監臨し給ふ。信濃守行光今日の行事たり、和卿の訓説に随ひ、諸人筋力を尽くして之を曳くこと、午刻より申の斜に至る。然れども、比所の為體は、唐船出入す可きの海浦に非ざるの間、浮べ出すこと能はず、仍つて還御したまふ。彼船は徒に砂頭に朽ち損ずと云々。

実朝は、宋の人陳和卿に唐船を造ることを命じていた。その船が完成し、いよいよこの日、鎌倉由比ヶ浜に進水することとなり、実朝は北条義時らを率いて見物に出かけた。諸御家人から召し出された数百人の人夫が陳和卿の言葉にしたがって力の限りを尽くし、午刻から申刻にかけて数時間にわたって曳くが、ついに船を海

に浮かべることはできなかった。『吾妻鏡』の編著者は、「此所の為體（ていたらく）は、唐船出入す可きの海浦に非ざるの間、浮べ出すこと能はず」と断じ、「彼船は徒に砂頭に朽ち損す」という醜態を後までさらし続けたのであった。

実朝が船を造ろうとしたのは宋へ行くためであったという。その経緯について、『吾妻鏡』は建保4年6月8日・6月15日・11月24日条に次のように記している。

○建保4年6月8日条

陳和卿参着す。是東大寺の大仏を造れる宋人なり。彼寺供養の日、右大將家結縁し給ふの次に、対面を遂げらる可きの由、頻りに以て命ぜられると雖も、和卿云ふ、貴客は多く人命を断たしめ給ふの間、罪業惟重し、値遇し奉ること其憚有りと云々。仍つて遂に謁し申さず。而るに当將軍家に於ては、権化の再誕なり。恩顔を拝せんが為に参上を企つるの由、之を申す。

陳和卿の鎌倉登場はかなり怪しげである。日本に招かれ、東大寺の大仏修復に多大の功績があったことは確かだが、その後の消息は不明である。それが鎌倉に下向して、頼朝とのかつてのいきさつを語り、実朝に近づいてきたのである。

○建保4年6月15日条

和卿を御所に召して、御対面有り、和卿三反拝し奉り、頗る涕泣す、將軍家其礼を憚り給ふの処、和卿申して云ふ、貴客は、昔宋朝医王山の長老たり。時に吾其門弟に列すと云々。此事、去る建暦元年六月三日丑刻に、將軍家御寝の際、高僧一人御夢に入りて、此趣を告げ奉る。而して御夢想の事、敢て以て御詞に出されざるの処、六ヶ年に及びて、忽ち以て和卿が申状に符合す。仍つて御信仰の外他事無しと云々。

ついに実朝との対面は実現した。和卿は、3度繰り返して拝し、はなはだすすり泣いて、実朝の前生は宋の医王山の長老で、自分はその門弟だったと申し上げる。実に得体の知れない話であるが、あろうことか実朝は、6年前の夢告に符合すると応じてしまうのである。そうして、前

世に住んだ医王山を拝するために渡宋を思い立ち、唐船の建造が和卿に命じられるのである。

○建保4年11月24日条

將軍家先生の御住所医王山を拝し給はんが為に、唐に渡らしめ御ふ可きの由、思食し立つに依りて、唐船を修造す可すの由、宋人和卿に仰せらる。又扈從の人六十余輩を定めらる。朝光之を奉行す。相州、奥州頻りに似て之を諫め申さると雖も、御許容に能はず、造船の沙汰に及ぶと云々。

ここに至れば、相州北条義時、奥州大江広元の諫言も役に立たなかったのである。

こうした不可解な渡宋計画を、歴史学者や文学研究者はまともに取り上げたりはしない。そこに『吾妻鏡』編著者の潤色の跡を見て、実朝の「聖化」ともいうべき実朝伝説をかぎとるからである。だから、歴史研究や文学研究の材料としてよりは、文学そのものの素材とされた。太宰治の『右大臣実朝』¹⁵⁾、山崎正和の『実朝出帆』¹⁶⁾は、不可解な渡宋計画をテーマとしているし、また、小林秀雄の『無常といふこと』¹⁷⁾でも、吉本隆明の『源実朝』¹⁸⁾でも実朝像を構築する上の主要なファクターとしているのである。

ところで、筆者は、実朝の太子信仰という側面からこの渡宋計画の意味を見ようとしている。政治的にいえば、聖徳太子の遣隋使を意識したものであるが、義時や広元に強く反対された時点で、すでに実朝自身もその実現を半ば諦めており、彼らによって目的がすり替えられ、矮小化させられていくことを容認さえしたふしがある。

聖徳太子の「聖化」は死後まもなく始まり、『日本書紀』の編纂時には釈迦伝説を初め、聖書のイエス復活物語なども加え、少なからず潤色されていた。弘仁7年(816)大阪磯長の太子廟に詣でた最澄は、「我が法華聖徳太子は、即ちこれ南嶽慧思大師の後身也。」という奉納文を残しているが、天台宗では早くから教祖慧思の生まれ変わりが太子であると信じられていた。こうして、各種の太子伝によって「聖化」した聖徳太子一代記ができあがっていくのである。

実朝の場合にも『吾妻鏡』によって「聖化」の道が敷かれ始めていた。陳和卿が持ち出した実朝の前生が医王山の長老という転生説話などはそのさえたものであり、太子の転生説話が下敷きになっているように思う。

太子が遣隋使をもって随との対等な国交を開いた故事にならない、唐船で自ら宋へ渡り、宋との交易を開くという政治家としての実朝の野心は、いつしか前世に住んだ医王山を拝するためには渡宋するという夢物語にすり替えられていったのである。

おわりに

周知の通り、聖徳太子に対する信仰は、太子の死後、「聖化」が進み、釈迦一代記などによって様々な伝説が作られ、「和国の教主」（親鸞の信仰）から「諸芸諸職の祖」（華道の祖、大工・左官などの守護神）まで、多彩な太子信仰を生んだ¹⁹⁾。

そうした中で、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての太子信仰は、平安時代の中頃から近畿地方に広まっていた「聖徳太子＝救世観音」とする信仰が主流だった。法隆寺夢殿の救世観音が太子の等身大に造られ、四天王寺が極楽浄土の東門に位置し、その本尊救世観音が応現したのが太子で、極楽浄土への救い主と信じられていた。『梁塵秘抄』（巻2）に、「極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対（むか）へたる、転法輪所の西門に、念仏する人参れとて」²⁰⁾と謡われ、彼岸には四天王寺の西門から海に入る夕日を拝して極楽を観想する「日想観」が流行したのである。

源実朝（1196-1219）が若くして非業の死を遂げたので完全には重ならないが、実朝と時代を共有した人物には、親鸞（1173-1262）や慈円（1155-1225）がいる。

建仁元年（1201）比叡山で修行中であった親鸞は、救世観音を祀る京都市中の六角堂に百日参籠をして「後世（ごぜ）の事」を祈り、その95日目の暁時に現れた聖徳太子のお告げ（夢告）を得て、法然の浄土門へ転じた²¹⁾。親鸞は「救

世観音大菩薩聖徳皇と示現して、多々（父）のごとくすてずして、阿摩（母）のごとくそひたまふ」などたくさんの太子和讃を残している²²⁾し、その太子信仰が初期の浄土真宗の布教活動に大きな影響を与えた。岩手県地方の参りの仏（十月仏）の信仰も初期の浄土真宗の布教活動に深く関わっている²³⁾。

天台座主を4度、四天王寺別当を2度務めた慈円は、その著『愚管抄』で、「コノ日本国観音ノ利生方便ハ、聖徳太子ヨリハジメテ」「観音ノ化身聖徳太子ノアラハサセ給ベケレバ」などと記して、「観音の化身聖徳太子」観を展開している²⁴⁾。また、摂関家である九条家の長老として、権勢にも奔走し、承久元年（1219）には甥の道家の子・頼経を実朝亡き後の4代将軍に、承久3年（1221）には順徳天皇が譲位されたので、仲恭天皇（生母は道家の妹・立子）が踐祚し、道家の摂政を実現させている。公武摂三者和合の政治形態が慈円の理想であったというが、その1ヶ月たらずのうちに起こった承久の乱によって、夢は碎かれてしまった。仲恭天皇は譲位し、道家も摂政を僅か任3か月足らずで免じられてしまった。慈円は失意のうちに四天王寺聖霊院に参籠して願文を奉じており、以後、しばしば太子の夢告を得たり、絵堂の再建に取り組んだりして、熱烈な太子信仰を示めている。

こうした時代の太子信仰の中で、若き日の実朝の信仰はひととき光彩を放っていると言えよう。母の政子や叔父の義時に押しつぶされながらも、父の頼朝の先例に倣って治世を執ろうとし、その中でたゆたいながらも太子の「十七条憲法」に目を向けようとしていた。持仏堂では、我が国最初の南無太子像と目される聖徳太子像を開眼供養し、聖霊会を催して熱烈な太子信仰を吐露した。たゆたいながらもアイデンティティを太子に求めた、ちょうどその頃、期を一にするように、釈教歌を始めとする雑部の歌群が生まれ、中世の代表歌集と称される『金槐和歌集』が成立したのである。

晩年の渡宋計画は、いつしか目的がすり替えられ矮小化していき、やがて、兄頼家の遺子・公暁によって鶴ヶ岡八幡宮の社頭で暗殺され

る、いわばその序章の一つに『吾妻鏡』の編著者は使ったのである。

渡宋計画とともに実朝が夢中になったのは位階の昇進で、義時の意を受けて諫言する広元に、「源氏の正統此時に縮まり畢んぬ、子孫敢て之を相継ぐ可からず、然らば飽くまで官職を帶し、家名を挙げんと欲す」と答えたとき、『吾妻鏡』建保4年(1216)9月20日条は記している。いたずらに砂頭に朽ちて損なわれていくばかりの巨船の無惨さとともに、実朝にとって逃れようもない無明の世界がちらつき、そのすべてが、『吾妻鏡』の承久元年(1219)正月27日条の「出でていなば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春を忘れるな」の歌に収斂させられて、その慄然たる生涯の幕を閉じさせる鶴ヶ岡八幡宮の社頭の間を迎えることになるのである。

若き日の源実朝にとって聖徳太子は、無明の世界でたゆたいながらも出会った自らの生の証しであり、存在証明なのである。

注

- 1) 新潮日本古典集成『金槐和歌集』樋口芳麻呂校注、新潮社、昭和56年、182頁。『金槐和歌集』の伝本には、藤原定家所伝本(「建暦三年十二月十八日」の奥書)と貞享四年板本との2系列があるが、本稿では前者を底本として校注された新潮日本古典集成本を引用出典とする。以下、同じ。
- 2) 『日本文学会誌』第7号、盛岡大学日本文学会、平成7年3月刊行予定に「源実朝の心象覚書『たゆたう心』」と題して発表した。
- 3) 『吾妻鏡』からの引用は、新訂増補国史大系『吾妻鏡 第二』(原漢文、吉川弘文館、平成元年6月)をもとに、岩波文庫『吾妻鏡』(龍肅訳注、岩波書店)などを参考に、書き下し文にして示した。以下、同じ。
- 4) 『聖徳太子伝暦』2歳条。『聖徳太子全集』第3巻、龍吟社、昭和19年、72頁。
- 5) 参りの仏は、十月仏などともいい、岩手県地方の特徴的な民間信仰の一つ。旧暦10月の定例日に、阿弥陀如来や聖徳太子などの掛図、あるいは聖徳太子などの木像を祀る民家や民間のお堂に、同族縁者などがお詣りする信仰。詳しくは、拙稿「まいりの仏と聖徳太子」(『岩手の

民俗』第3号、岩手民俗の会、昭和57年)、同「まいりの仏(十月仏)の祭祀」前編・後編(『岩手県立博物館研究報告』第3号・4号、昭和60・61年)、同「『北越雪譜』の黒駒太子」(『岩手の民俗』第7号、岩手民俗の会、昭和61年)を参照。

- 6) 原稿執筆中に、歴代天皇が即位の際に着用された衣冠束帯を贈られる遣風のある京都・広隆寺蔵の摂政太子像に胎内銘があるらしく、平安時代に制作されたことが判明したというニュースが流れたが、未確認のため、ここには例示しなかった。
- 7) 『日本書紀』皇極天皇紀によると、山背大兄王は蘇我蝦夷と対立したとき、味方してくれる蘇我摩理勢に、「先王臨没、諸子達に謂りて曰く、諸の悪をば莫作そ、諸善を奉行へと。余れ斯の言を承りて、以て永き戒と為す。」と、聖徳太子の遺戒を持ち出して争いを避けるように諭したという。やがて、皇極天皇2年、大兄王を始め太子一族は、蘇我入鹿に攻められ、法隆寺で自害し滅亡した。
- 8) 戸田義雄先生はこのときの感激を「苦に耐える勇氣—聖徳太子像“みけんの傷”に思う—」(『日本の感性』日本教文社、昭和49年。初出は『読売社聞』宗教欄、昭和44年1月12日号)と題され、次のように記された。(／は改行)

静かにとびらが開かれる時の畏怖にも近いおののきに一時は縮み込んでしまったが、住職さんの「どうぞ」という声にわれにかえった。落ち着きを取りもどしてから伏しおろがむにつれ、突然私の目を鋭くとらえたものがあった。／みけんに傷が！／思わず私は声を放ってしまった。(中略)

天洲寺の太子像は大江広元の四男、季光が造立したとある。季光は三浦の当主、泰村とともに北条に討たれ、三浦一族の滅亡と運命をともにした悲劇の人である。その彼が生前に、源実朝が暗殺されたあと、出家をとげた二人の兄の供養のために造立したのである。実朝、大江季光の一門など、みな例外なく悲劇の主である。名もない民衆も、名だたる権門の人らも、等しく苦しむ者の共感から仰ぎまつたみ仏こそ誰だろう、若くして苦に耐えられる御姿の太子像であったのである。ここに、教理史の表面からはうかがい知れぬ日本人の真の救いの歴史、生きた宗教の展開史がよみとられる。／「悲心抜苦」とのたもうた太子を仰ぎみる者らにとって、太子は何より救いの教説を高みから説かれる御姿で

あつてはならなかったはずだ。われわれと同じように苦しめつつ、ただじっとそれに耐えられる身近にあられます人格であられるはずであること、このことは「共に是れ凡夫のみ」と仰せられたみことばによって客証せられておると信じたことである。しからばその忍苦の御姿を形相化する最高の表現形式はなんでなければならなかったか。ここにみけんの傷の発想が生じたと私はみる。

つまり、戸田先生は、天洲寺の孝養太子像の眉間の傷から、恥辱と苦悩に耐える「忍苦の相」を見てとり、真に苦悩を癒すものは、苦に耐える勇気であり、苦しむ者の苦しむ者への共感、この連帯の中に、心の安らぎを得る、と看破されたのである。先生の太子観は、この「忍苦の太子」であったように思う。

- 9) 杉山二郎稿「天洲寺聖徳太子像 — 聖徳太子像研究のうち(一) —」『美術史』29, 美術史学会, 昭和33年7月, 19・20頁。
- 10) 同論文, 22頁。
- 11) 新訂増補国史大系『尊卑分脈』第4篇, 吉川弘文館, 昭和33年, 97~104頁。
- 12) 岩波古典大系『日本書紀』岩波書店, 昭和40年, 164頁。
- 13) 川岸宏教校注「四天王寺御手印縁起」『聖徳太子・南都仏教集』所収, 玉川大学, 昭和47年, 208頁。
- 14) 上原 和著『斑鳩の白い道のうえに』朝日新聞社, 昭和53年, 121~125頁。

- 15) 太宰 治著『右大臣實朝』錦城出版社, 昭和18年。
- 16) 山崎正和著『実朝出帆』(書下ろし新潮劇場)新潮社, 昭和48年。
- 17) 小林秀雄著「家朝」『無常といふこと』創元社, 昭和21年(『文学界』昭和17~18年連載)。
- 18) 吉本隆明著『源実朝』筑摩書房, 昭和46年。
- 19) 聖徳太子信仰についての研究には, 林幹弥著『太子信仰 — その発生と発展 —』(評論社, 昭和47年), 同著『太子信仰の研究』(吉川弘文館, 昭和55年) 金谷勇著『聖徳太子信仰』(春秋社, 昭和54年), 田中嗣人著『聖徳太子信仰の成立』(吉川弘文館, 昭和58年) などがある。本稿では, 中世における太子信仰にも深く触れている林氏の著書に, 特にお世話になった。
- 20) 岩波古典文学文学大系『梁塵秘抄』岩波書店, 昭和40年, 367頁。
- 21) 恵信尼が娘の覚信尼に宛た弘長3年(1263)2月頃の書簡(日付なし), 岩波古典文学大系『親鸞集・日蓮集』岩波書店, 昭和39年, 219~221頁。
- 22) 親鸞が作った聖徳太子に関する和讃は3種類ある。「皇太子聖徳奉讃」(75種, 建長7年作), 「大日本国粟散王聖徳太子奉讃」(150首, 康元2年作), 「皇太子聖徳奉讃」(11首, 康元2年前後作)。
- 23) 注5) 参照。
- 24) 岩波古典文学大系『愚管抄』岩波書店, 昭和42年, 136頁~140頁。